

博物館の収蔵庫に眠る考古資料

「ほっとやまはく」
タイム⑯



時代の変化とともに博物館の役割も変わりつつあります。現在、求められているのはこれらすべてのなかかもしれません。

博物館の収蔵庫

博物館の役割といえば何が思い浮かんでくるでしょうか。展示でしかねない機能といえるのか。教育、調査・研究でしょうか。それとも、観光、まちづくり、まちおこしでしょうか。社会、

博物館の中でも、「資料の収集と保存」はとても地味です。しかし、実は博物館にとって欠くことのできない機能といえるのです。

山口博物館の幾つかの収蔵スペースにはたくさんの資料が保管されています。



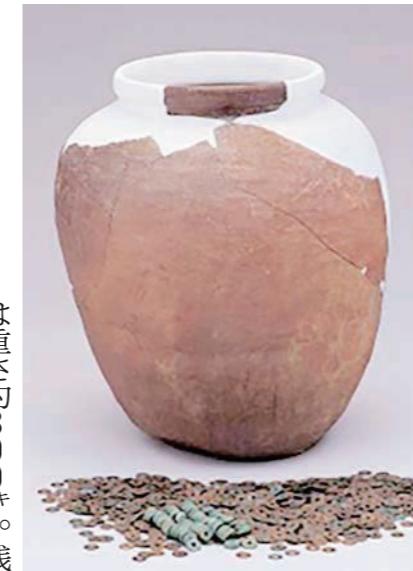
その扉の奥は、一年中変わることなく温度約20度、湿度約50%の環境で、外扉は金庫のような大変重い鉄の扉です。その扉の奥は、一年中変わることなく温度約20度、湿度約50%の環境で、外扉は金庫のよ

ます。それらの収蔵スペースのうちメインの「収蔵庫」の扉は二重になつていて、外扉は金庫のよ

うに保たれています。なぜ、このような温度や湿度に細心の注意を払っているのでしょうか。それは、山口県の歴史や文化を語る資料を良好な状態のまま未来へと伝えていくためなのです。

山口博物館の収蔵庫において、約3分の1のス

ペースを占めるのがおおよそ900件の考古資料です。ほとんどが県内で出土したものですが、朝鮮半島や中国、台湾の資料も収蔵しています。この連載では、収蔵庫に大切に保存されている考古資料の中でも、読者の皆さんにぜひ、知っていたいだけたい品々をご紹介していきたいと思います。



興隆寺出土の備前焼甕と銅錢

興隆寺で見つかった 室町時代のお金

出土銭から 分かること

今日は、室町時代に畿内西国の霸權を握った大内氏に関わる資料をご紹介したいと思います。山口市大内御堀にある興隆寺は、中世に大内氏の氏寺として栄えました。興隆寺は、1341年に火事で焼けてしまいます。49年に本堂が再建されれたのをはじめとして復興が進みました。そして、1404年には大内盛尼によつて盛大な法要が行われました。

それから約600年。1972年に興隆寺付近の工事中に、地下約1メートルの深さから備前焼の大甕（おおがめ）に入つた大量の銅錢が出土しました。備前焼の大甕は、その形から1450～1500年ごろに作られたと判断できます。そして、甕の中から見つかった錢



さまざまな種類の錢

は重さ約300キロ。銭一枚の重さを約3・5グラムすると、約8万5000枚もの錢が甕に入れられていたのです。

このことから、さまざまなもの品物の値段が高くなっています。円安ドル高での相対的な価値が低下しているようです。今の日本では「円」という自国の

通貨があり、円とドル等の交換レートが経済に大きな影響を与えていました。ところが、室町時代の日本では自国の通貨を持っていました。当時は、中国や朝鮮半島など海外から輸入されたものを使ったのです。同じ銅錢を使つということは、さまざまなもの品物の売買、つまり貿易には大変便利で、この時代の日本と東アジアとの経済的な一体性を示すものともいえるでしょう。

さて、これらの銭には表に二～四つの文字が鋳出されており、その文字から何年以降に造られたのかが分かります。一枚ずつ文字を判別した研究の結果、最も古いのは中國で紀元前14年に初めて

造られた「貨泉」、最も新しいのは、朝鮮で1423年に初めて造られた「朝鮮通寶」でした。これらの大内氏は、日明貿易で多くの利益を生み出していました。その利益の一部を氏寺であった興隆寺に寄進していたのではないか、ともいわれています。

この他にも山口博物館の収蔵庫にはたくさんの中古品が値上がりして、海外から輸入する材料や製品が値上がりしているようです。今の日本では「円」という自国の

銭が埋められていました。理由はよく分かりませんが、大内氏は、日明貿易で多くの利益を生み出していました。その利益の一部を氏寺であった興隆寺に寄進していたので、その魅力を広く伝えたいと思います。

阿部来（学芸員・考古担当）

▽次回は20日です。

山口県立山口博物館
TEL 083-922-0294
月曜休館（祝日の場合は翌日）。
最新情報はホームページで。

